

静華の様子を見ながら、少年は少しずつ腰の動きを大きくしていった。

「きやいいいいんっ！ いいっ！ 子宮に……くううん、すごいコンっ！ あっ、ああああん、わたし、こんな声……は、はしたない……きやうううんっ！」

できれば、大介に淫らな喘ぎ声を聞かせたくない、という思いはあった。しかし、彼からもたらされる圧倒的な快感の前には、そんな気持ちも霧散してしまう。

それに、後背位が動物的な体位ということもあるのか、恥ずかしさに妙な安心感も伴っている。

ところが、大介は不意に動きをとめると、少女の上体を持ちあげた。そして、自分の上に静華を乗せるようにして自らが床に座る。その瞬間、結合部に自らの体重が集めた。

「くあああああっ！ ふ、深iiiiiiiiい！」

ペニスが身体 of さらに奥まで突き刺さって、少女は思わず叫んでいた。

だが、不愉快な感覚ではない。むしろ、今はこの深さが少年との一体感をもたらし悦びに思える。

大介が少女のウエストに腕をまわし、突きあげるように腰を動かしはじめた。

「あああああっ！ すごっ！ 突き抜けそううう！」

子宮口をノックされるたび、すさまじい快感が脊髄^{せきずい}を駆けあがって、静華の脳天ま

で一氣に貫いていく。

「ほら、静華さんも腰を動かして」

少年にうながされ、静華は小さく腰をくねらせてみた。

「きゃううううん！ いいコン！ あんっ、あああんっ、これえっ、き、気持ちいいのおお！」

自ら腰を動かすなど、いつもなら絶対にできないだろう。しかし、発情したコンの意識のせい、今はさらなる快楽を求めることしか考えられない。

大介は少女のバストをつかむと、手に力を入れてグニグニと揉みしだいた。

「はひいいい！ キヤウウウン！ それ、いいのお！ 大介さん、もっとおおお！」

ネコ耳少女に揉まれていたとき以上の快感がもたらされて、静華はつい甲高い声かんだかを張りあげていた。

さらに、大介は少女の首筋にキスをして、舌を這わせた。すると、首筋からもなんとも言えない快電流が全身を駆け抜けて、思考をしびれさせていく。

（ああつ、幸せえ！ この心地よさが、ずっとつづけばいいのに！）

ずっと思いを寄せていた少年に愛してもらっているということに、静華は人生で最良とも言える喜びを味わっていた。

ところが、そんな思いを察したように、少女の傍らかたわでグッタリしていた真由が身体

を起こした。

「ふみやああん……静華しゃん、あたしが手伝ってあげるニヤン」

と言いながら、ネコ耳少女が顔を近づけてくる。

「ああっ！　だ、ダメえ！　あんっ、あんっ、やめ……んんっ！」

背面座位では逃れようもなく、少女の乳首は真由に啜^{くわ}えられてしまった。

啜えるなり、一歳年下の少女はまるで母親に甘える赤ん坊のように無心に乳首をしゃぶってくる。

「んむうううう！　むんっ……んんんんっ！　んぐ、んぐ、んぐぐううう！　んっ、んっ、んんん……」

静華は抵抗を試みたが、発情しきった肉体は新たに加わった快楽をいつしか受け入れてしまう。

（もう、ダメえ……わたし、どうにかなっちゃいそう）

大介には下から突きあげられ、さらに胸を揉まれながら首筋を舐められ、真由からはもう片方の胸を責められる。

この四カ所からの鮮烈な快電流の嵐に、静華は切羽^{せつぽ}つまった感覚を味わっていた。

「ああっ、すごい！　さっきより、もっと……もっと大きなのが身体の奥から来る！　もう、わたし耐えられない！」



レズ行為やクンニリングスで達した以上の、今までに感じたことのない昂^{たかぶ}りが一気に爆発しそうな予感が、脳裏を駆けめぐる。

「うああっ！ し、静華さんのなか、チ×ポにすぐ絡まってきて……そんなにされたら、俺もう出ちゃうよ！」

大介が、呻くように訴えてきた。どうやら、声を出せないぶん、膣に力が入ってしまつたらしい。

「出してコン！ 出してください、大介さん！ なかに、わたしのなかにも、いっぱい出してくださああああい！」

静華はネコ耳少女の唇を強引に胸から振り払って訴えていた。

「ふみやあつ！ ダメえ！ 大介、静華しゃんのにやかに出さによいでよお！」

真由がなんとも悲しげな声をあげ、一歳年上の少女を引き剥がそうと試みる。

だが、もうここまでできたら遠慮もしていられないのだろう、大介はネコ耳少女の声を無視して荒々しく腰を突きあげてきた。

そうして子宮口を何度かノックされると、静華にとうとう快樂の限界が訪れた。

「あつ、あつ、ああつ、もう……きやはああああああああああん!!」

少女が絶頂の声をあげるのと同時に、大介も「くっ」と声をもらし、胸をつかんだ手に力をこめる。それとともに、静華は膣内で熱い液が弾けるのを感じた。

「あああああつ、熱いの……ザーメンが……いっぱい、いっぱい……」

膣のなかで、大量のスペルマで満たされていく。さらに、逆流した精が結合部から溢れて床に落ちていくのも、はつきりとわかる。

精液の放出が終わるのに合わせて、エクスタシーを味わった身体からも力が一気に抜けていった。

（あああ……幸せえ……わたし今、すごく幸せなお……）

静華は絶頂の余韻に浸りながら、これまでの人生でもっとも満たされたような感覚を味わっていた。思いを寄せていた少年から濃厚に愛され、精をお腹いっぱいになるまで注いでもらったのだから、これほどの幸福はない。

「ふみゅー！ 大介のバカバカ！ なんて、静華さんのなかにもセーエキ出しちゃうのよお！」

と、真由が荒い息をついている少年に文句を言っているのが、妙に遠くから聞こえてくるように感じられる。

（……精……液？ ああんつ、大介さんのオチンメンが、わたしのなかでピクピクして……えっ？ オチンメン……それに、精液って……）

不意に、静華の心に理性が戻ってきた。あれほど身体中に渦巻いていた性の渴望も、ウソのように消えている。